

Ⅲ 中学部の実践

1. 研究の概要

(1) 今年度の取り組み

① 取り組みのねらいと実際

昨年度 私たちは研究の対象として「散歩」を取り上げ 子どもたちの豊かな成長を願って散歩の実践を行った。

今年度も引き続き「散歩」を取り上げ 実践を更に積み重ねていくこととして 子どもの実態に即した課題や散歩の形態を探ってきた。

子どもたちは散歩を通して仲間を意識し 思いやりを持ってかかると共に 集団の中の一員としての自分自身を自覚して 自らの行動を決定していく。あわせて自然や人・物・場所など様々な出会いのなかで 好奇心・探究心を持って主体的・積極的に行動し 自ら経験し発見する喜びを味わうのではないだろうか。

中学部では今年度の研究目標として「子ども同士のかかわり合いを大切にして 自然や社会へのつながりを深めていく」ことをあげ「散歩」学習に取り組んだ。

実践のなかで その時々の子どもたちの言動や 仲間とのかかわりに目を向けるとともに 昨年度と同じ場所 同じ場面での散歩を比較することで 子どもの成長の様子などを見ていった。また 散歩時の子どもたちの様子やエピソードなど 気づいたことを話し合うなかで改めて散歩の良さを再確認するとともに これからの散歩の方向や内容などについても更に検討を加え「散歩」の教育的意味を明らかにしていきたいと考えた。

この「散歩」の研究実践が子どもたちの「豊かな心と生活」をめざした今年度の学校全体の研究テーマにもつながっていくものと考えている。

② 「散歩」のカリキュラム化

現在 中学部における「散歩」は主に学級単位の「生活」の時間を使って 年間を通じて行われている。

昨年度 私たちは「中学部における散歩のねらい」として 表Ⅲ-1のように定め 散歩を行う際の柱として活用してきた。しかし実際に散歩を行おうとする時には今一つ具体性に欠け 必ずしも各学年の実態や個々の生徒に即していない場合も生じる。そこで今年度は いままで各学級が実践してきた散歩コースや目的などについて整理し 具体的な散歩を考える手だてとなる項目も付け加えて 表Ⅲ-2のような活動内容表を作成した。これは特に時期や学年を明記せず 最小限の形態や内容を示すにとどめ 目の前の子どもの興味・関心や発達段階に合わせて柔軟に対応できるものとした。

これによって教育の場における散歩のあり方を少しでも明らかにするとともに「散歩」を中学部の教育課程の「生活」の一単元として捉え カリキュラムに採り入れ 指導の目安となるようにしたいと考えている。

表Ⅲ－１ 散歩のねらい（目標）

一年目	〔集団〕 クラスの仲間を意識する 〔個人〕 自己決定をする	1年生	2年生	3年生	三年目	〔集団〕 仲間とともに考える 〔個人〕 集団の一員として行動する
	〔集団〕 仲間とともに楽しむ 〔個人〕 自分と他（人・物・場所）とのかかわりを認識する					

表Ⅲ－２ 「散歩」の活動内容表

◆散歩の形態（方法）

ぶらり散歩	目的散歩
-------	------

- 教師主導型と生徒主体型
- 集団で行く散歩と個人で行く散歩

- 教師主導型と生徒主体型
- 集団で行く散歩と個人で行く散歩

◆散歩の場（対象と題材）

自然との かかわりを求めて	街との かかわりを求めて	社会との かかわりを求めて
------------------	-----------------	------------------

- 川に出かける
- 石ころ道を歩く
- 草むらを歩く
- 花を見つける
- 秋の山を歩く
- 竹林を歩く
- 雨の中を歩く

- 学校周辺を歩く
- デパートに出かける
- 公共施設に出かける
- 市内バスを利用する
- 階段道を歩く
- 橋をたどる
- 坂めぐりをする

- お店を見つける
- お店で食べる
- マンホールをさがす
- 用水をさぐる
- バス停をたどる
- 出会った人と交流する
- 交通ルールを知る

◆散歩へのアプローチ（ねらいと言葉かけ）

散歩になれる	→	散歩を楽しむ	→	散歩を知る
--------	---	--------	---	-------

- 「お出かけするよ」
- 「〇〇行くよ」
- 「〇〇を歩いてこよう」

- 「いいお天気だね」
- 「〇〇見てこようか」
- 「今日の先頭〇〇さん」

- 「何が好き」
- 「何したいかな」
- 「どこ行こうか」

◆指導の手だて（教師の姿勢）

気づく	→	見守る	→	支援（援助）する
-----	---	-----	---	----------

- 見る
- 知る
- 感じる

- 待つ
- 認める
- 受け入れる

- ヒントを示す
- きっかけを与える
- 気づかせる

（２）散歩のとらえ方・考え方

① 学校における散歩

人それぞれに「散歩」という言葉に対してのイメージがある。その大部分は一人か二人でぶらりと近所を歩いてくるという程度のものであろう。学校で行う散歩にも同様のイメージが重なるが 私たちが学習の場で行う散歩は 一般において行われる散歩とはやや

異なったものになる。学校の散歩では教師や友達と一緒に出かけることになる。目的を特に設定せずに出かける「ぶらり散歩」や目的を持って出かける「目的散歩」などがある。前者は一般に行われる散歩のイメージに近いものといえる。

一般の散歩でも心のリフレッシュや健康のため または心の内に知らず知らず求めるものがあるように 学校で行う散歩にもやはり目標やねらいがあると考えるのは当然である。しかしながら 学校で行う散歩も決して特別な活動というのではなく 散歩本来の良さであるゆったりと歩いて開放感を味わうことや ゆとりを失うことのないように留意したい。「散歩」の持つ意義をもっと幅広く捉えて教育の場で生かしていきたいと考えている。

② 学校での散歩のねらい

中学部の子どもたちはいわゆる思春期を迎える年代であり 情緒的にも不安定な時期である。また少しずつ周りに目を向け 行動力や知的関心の高まる時期でもある。反面 人や仲間との関係をうまく結べない 指示がないと行動できない 自ら周りに働きかけたり受け止めたりする力が弱いなどという実態がある。このような実態を踏まえ 子どもたちに対しどのような場面を用意し提示していけば良いのであろうか。

学校における散歩の特徴は教師や友達と一緒に出かけることであり 少人数とはいえ集団で行うという点であるといえる。そこでの友達とのかかわり合いは集団参加への重要な一ステップといえる。また様々な出会いの喜びや驚きがあり 教室だけでは生まれない学習のチャンスを創出する。

散歩では子どもの気持ちが開放され 普通の教室の中だけでは見られない子どもの姿を見ることができる。教師自身も生徒と一緒に散歩を楽しみ同じ時間を共有する。子どもと同じ視点に立つことで 子どもの気づきに教師も気づくことができる。まず外に出ることで子どもの姿をじっくりと見ることが大切である。

更には教師は 生徒たちと散歩に出かけても単に連れ歩くだけでなく 一人一人の子どもの課題を想定し もっと実際的な子ども自身の活動や 生徒自ら判断し行動を決定する場面を心掛けることが大切である。また子ども自身の本来持っているものを大切に考え その子の良さが発揮できるような配慮も忘れてはならない。子どもたちを心地よい思いのできる場に導くことが 次の大きな成長にもつながるのではないだろうか。教師は子どもに対しどのような働きかけをして何を目指すのか 大人側の工夫や意図的なものが必要であるといえる。

散歩では 目の前の条件は刻々と変化し 子どもはそれに対しての適切な対応が求められる。自らの働きかけだけでなく 五感を通して直接語りかけてくるものもある。それらを自分のなかでどう受け止め 感じ取り 周りに伝えていけばよいのか。これは決して学校内や教室内では体験することのできないものであるといえる。子どもたちは身体を動かし行動するなかで学んでいく。

「散歩」への取り組みは将来子どもたちが一人で散歩できるようになることを目指すものではなく あくまで子どもたちの発達を促すための一手段として捉えている。すなわち仲間との関係を広げ深めることをはじめ 自然や社会に対してのかかわる力がより大きく育っていくことを願っている。

(橋本直紀)

2. 各学年の実践

(1) 中学部1年の実践から

① 生徒の実態

中学部1年生は 本校小学部から進学した男子2名女子1名に 市内の小中学校から入学した男子1名と6月に他県より転校してきた男子1名が加わった計5名の学級である。

まず生徒のことを知ろうと 入学当初の4～5月の期間に行われた春の遠足やスポーツテスト 学校周辺を歩いた散歩などで じっくり観察してみた。その時の生徒の様子は途中で座り込んだり 終始歌やお喋りを教師に求めたりして 歩かされることを「嫌だ」と表現する姿や 体力的には問題がなくても 好きな土や枝などを触ることに熱中して自分のペースで歩く生徒たちの姿だった。スタート時 たった4人の小集団でありながらそれぞれが自分の思いだけで行動し 級友を仲間として意識する様子が見られないバラバラな状態だった。

② 実態からのテーマ設定

まずは 子どもたちのことをもっと理解しようと考えた。ありのままの生徒の姿をみることが出来る散歩がどんなものかを追いつつ 1年間を通して 次のような散歩をめざすことにした。

- ・一人一人が楽しいと思える散歩
- ・自分で考える散歩
- ・共に行動し共に感じ合う中で クラスの仲間を意識していく散歩

③ テーマについての考察

何よりも「外は楽しい」という気持ちを一人一人の心の内に育てたいと思った。生徒たちにとって 好きなものに自由に触れたり 好きなペースで歩いたり 楽しいことが待っていたりといったことが十分に体験できる散歩とはどんな散歩だろうか。生徒に どこへ行くのだろうかという不安を持たせないようにすることや そこがどこなのか分かりやすいということも大切にしなければならない。また 事前指導や事後指導で「行きたい」という気持ちを生徒と共に確かめ合ったり 教室の中でも育み合いたい。そんな希望や思いから 学校に近い浅野川の川原で散歩を展開しようと考えた。

川原という豊かな自然の中で 遊んだり感じたりする場にもたくさん出会えると思われた。教師も含めみんな一緒になって「楽しめる」ことによって 生徒の気持ちも開放されそれぞれが持っている個性を生き生きと出せる場にもなるだろう。時には 小さな冒険に挑んでみることもできる。自分でどうするか考える場面にもたくさん出会える。さらに視界が広いので 友達や教師の姿を遠く離れても見ることができる。臨場感あふれるその場その時に 友達を意識したり働きかけたりといったかわりが さらに級友を「仲間」として 自分の中に受け入れていく機会になると考えた。

④ 実践例

川に行きだした頃

5月末 「楽しい散歩」をめざして川原に出かけ始めた。土や枝や草が好きなら それ

らを思いきり触らせたい。靴が濡れたり服が汚れたりしても 叱ったり不快な思いをしないようにしたいと 事前に保護者にも理解と協力を求め サンドルや着替え タオルなどの「遊びの道具」を各自のリュックに詰めて背負わせた。リュックを背負うことで 楽しいことが待っているよ という事前の気持ち作りにも役立った。



川原に着くと 生徒たちは自由に遊べるということが すぐに分かったのか のびのびと遊びだした。しかし 溝の水を飲もうとしたり 人がいてもおかまいなしに石を投げたり サンドルに履き替えるのが「いやだ」という様子を見せたり 川原の石の上が恐くて歩けず むずかる子どもたちの姿もあった。それでも できるだけ自由にさせたいと考え 楽しい雰囲気作りを心がけるようにした。また教師も一緒になって魚を捕まえたり といった遊びを楽しんだ。教師の遊びに生徒が参

加してきたり 反対に生徒の遊びに教師が参加したりするうちに 川原での遊び方がつかめてきた生徒もいた。また全く周りを気にすることなく ズックのまま川の水の中に入って一人で感触を存分に楽しんでいる生徒もいた。ハラハラすることもあったが 楽しそうに遊んでいる生徒を見て川を目的地にして良かったと思った。

気を良くした担任は そうした散歩を続けながらも「散歩は歩くこと」「川を学習させたい」という思いで 上流へ上流へと目指そうとしたり わざと難しい道を歩かせようとした。それがその後「楽しい散歩」から かけ離れ出すことになった。



意を決して

歩かされることに抵抗したT男の変容

T男は「歩かされるのが嫌い」な生徒であった。座り込んで「もっと遊びたい」という気持ちを表現していた。しかし 「歩くことが嫌い」だと誤解した担任に「先に行けばそのうちついてくるだろう」と川原に一人残された。上流に向かった一行に 数百mも離されて不安になったのだろう 渋々としていくしかなかった。またある時 最後部を歩いていた彼は 友達の手を引いてわざと反対方向へ歩こうとして担任に叱られたこともある。T男への対応が難しく感じられたまま 1学期は終わった。

ところが 夏休み 家庭訪問の際に 一緒に自転車に乗って近所を散歩する機会があった。母親から日頃も自転車に乗って 近所を走り回っていると聞いていたが 本当によく道を知っており 車が来ると止まってやり過ごしたり わざと公園の中に入って寄り道をしたり 知っている店の前では「あれ せんせ」と教えてくれたり とても生き生きとしている姿があった。1学期の散歩で「いやだ」と座り込んだり 涙を見せたり 時には頭

を地面に打ちつけて抵抗していた彼は 何だったのだろう。甘えとは違う。体力がないわけでもない。「もしかすると……」と いう思いである計画を練って2学期を迎えた。

2学期が始まったある日 グループ学習で郵便局まで行った経験のあるT男に「学級みんなを案内してくれ」と頼んだところ 先頭に立って「せんせ あっち」と指差しながら 大はりきりで仲間や担任を案内する姿があった。やはり これだった。つまり T男は「歩かされるのが嫌い」な生徒だったのだ。このようなT男の変容から 主導権を生徒たちに 移していくような散歩も必要と思った。

10月の散歩でT男は 教師が呼びかけても振り向きもせずに どんどん一人先行するS男を追いかけて「バツ おしり ペン!」「ひとり だめ(みんな)いっしょ!」と呼びかけるようになっていた。T男にとって リーダーシップの発揮が道案内することから友達へと移っていく出来事であった。S男は 大人ではない仲間が語りかけたことにショックとも言える新鮮な驚きがあったようで しっかり受けとめて聞いていた。T男にとってもS男に受け入れられたことが気持ち良かったのだろう。もし この時S男が聞き入れていなかったら T男は友達へのかかわりを快いものだと 思わなかったかもしれない。それ以後 二人の かかわり合いは深まり「まで いっしょ」と声をかけたり互いの興味あるものを覗き込んだり S男がT男の乗るバスに興味を示すなどの様子がよく見られるようになった。

T男にとって散歩は リーダーシップがとれて楽しい散歩から 今少しずつS男を含めた学級の仲間とのかかわりを「楽しい」と思う散歩に変わりつつある。

「川 いく 91」と言い出したS男の変容

S男は 小枝を指で弾いては その音を楽しむことが好きな生徒である。



バスを待つ

バスにとっても興味があることを知った。また「91」が キーワードになってS男とのコミュニケーションが楽しいものになり始めた。

7月 これまで一番近くの橋を起点にして 上流へと辿ることを目的に 何回か散歩を続けていたが とうとうこの日の散歩では 時間的に歩いて往復することが出来ない程の遠方まで来たので 帰りに路線バスを利用した。そのことが S男にとって「散歩」に今までの「枝がいっぱい拾える楽しさ」とは違った 別の意味を持たせることになった。彼は もともと路線バスを利用して通学する生徒であるが まさか学校で他の路線バスに乗るとは思っていなかったのであろう。翌日の保護者からの連絡帳に「家に帰ってから 超ご機嫌で 何やら『91』とばかり言っています。通学のバスは 70番のバスなのですが どうしたのでしょうか」と 知らせてきた。もしや と思い早速バス停に行き確かめてみると 昨日乗ったバスが91番のバスであることが分かった。教師たちは 乗ったバスの行き先しか見ていなかったのだ。そのことで S男がバ

9月以後 散歩に路線バスを頻繁に利用するようになると S男は「川 いく 91 (91番のバスに乗って川に行きたい)」と 毎朝のようにリクエストするようになった。その頃 路線バスの通学を始めたY男や それまで殆ど公共の交通機関を利用したことのないW男にとっても バスの利用は楽しかったのか バス停でバスを待っている間も バスに乗っている間も とてもいい笑顔が見られた。

12月のある日 担任は かぜが流行していたので「きょうは どこか 近くを 散歩しよう」と 目的地も手段も未定のまま 生徒たちに玄関に行くように知らせた。ちょっと遅れて玄関についた担任の姿を見つけるやいなやS男とT男が先に歩きだした。慌てて追いかけると 近くのバス停で バスを待つ2人がいた。自分たちで 今日の散歩を考え そこまで主張していることが嬉しくて そのままバスに乗って彼らの行きたいところについていった。

待つことで来るようになったのか？W男の変容

6月に転校してきたW男は 経験が乏しいためか川までは先頭をきって歩いても 急な階段や草むらに差しかかると決まって教師の手助けを求めて大泣きするような生徒であった。当初は早く新しい学校や友達に慣れてほしいと 無理をさせずに教師がいつも横について すぐ援助するようにしていた。



「ドキッ ここ行くの？」

7月 川沿いの道から川原に下りる急な階段にさしかかった。W男が転校して来て1カ月半が経ち そろそろどこまでできるのか知るために 上の道に置き去りにしてみた。他

の生徒は川原で遊ばせて 下からどんな行動を見せるか待ってみることにした。最初自分の置かれた現状がよく分からなかったのか キョトンとしていたが 次第に大泣きに変わっていった。この時 横には同じように「こわい いや」とぐずっていたY子がいた。しかし 彼女が先に意を決して下りに行くのを見たからか それとも30分以上経っても 一向に助けに来ない教師を見てか とうとう後向きになってゆっくり下りてくる姿があった。

この日の散歩でW男が「(助けてくれ)」と大泣きしても 自分で状況を判断し自分の力で先に進むことのできる生徒であると分かった。それ以後 そうした場面では待つようにした。次第に待つ時間が短くなり W男の成長を嬉しく思っていた。

10月 この日も平坦な舗装路から川原に下りる草むらで W男は立ち止まって大泣きを始めた。担任は20~30m離れたところで待ってみた。30分も経った頃であろうか 他の子どもたちが一緒に行こうと促す仕草を見せたり 近くまで戻ってウロウロとして気にする様子を見せたり 仲間につられて手招きしてみたりと いろいろなかわりをし始めた。W男は ゆっくりゆっくり仲間のところへ歩み寄った。

W男にとって 教師に待たれることで歩みだすのではなく 自分のことを気にしてくれ

る仲間の存在が「歩みだそう」という気持ちにさせたのだと ハッと気付かされた。また待ちすぎて 一番大切にしていた「楽しさ」を失いかけていることにも 子どもたちに教えられた気がした。

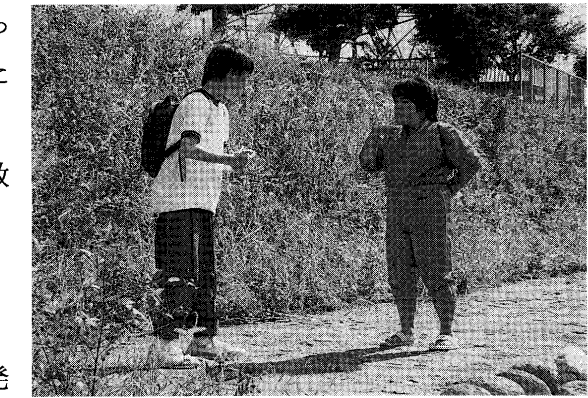
⑤ まとめ

「土、草、水、枝」が好きな生徒がいた。それが「川」を散歩の舞台にしようとした発端であった。ところが 実際に出かけてみると 子どもたちのいろいろな自然な姿を見ることがあったり 思わぬ展開をみせたりもした。教師自身もまた いろいろなアイデアが つぎつぎとわいてきたり 生徒とは別の楽しみを見つけることができた。だからといって川が散歩の場として一番良いというのではない。たまたま 今年の中学部1年の生徒にとって最適な場所であったように思われる。

「楽しい散歩」を目指したことが 子どもたちのことをより理解しようという気持ちになったり 時として学習させようと意気込んで 反省させられるということもあった。また「待つ」ことの大切さを子どもたちの成長から痛感することもあったが それ以上に「仲間のかかわり」がより大きな力となることも感じた。外という それも広くて自然の



「天気はいいし 水は気持ちいいし…」



友だちを 心配して

豊富な川原の中で 開放感いっぱい自己表現する生徒の姿は 教師の目にも子どもたちの目にもよく映ったと思う。そのことで 仲間を意識することが深まっていったようだ。

また 「川 いく」散歩を通して いろいろな人やものや自然との出会いがあったり 興味・関心が広がったり 初めて体験したりという楽しみ方もできた。その喜びをみんなで共に味わえたことが「楽しい散歩」になったのではないかと思う。

(松本 賢二)

(2) 中学部2年の実践から

① 生徒の実態

中学部2年生は男子3名女子4名の計7名である。身長が170cmを越える生徒から130cmに満たない生徒までと体格の差が大きい。また 過度の肥満傾向にある生徒や反対に食が細く体力に影響する生徒もおり 歩幅や歩くスピードに反映される。

言語面では言葉のやりとりで友達同士 コミュニケーションをとれる生徒もいれば 自らの発語はなく 大人からの言葉かけなら少し理解できる生徒もいる。

散歩においては 参加の仕方に次の2通りの様子がみられる。

積極的にかかわるタイプ

言語によるやりとりの可能な生徒が主である。学校周辺の地理を少し理解できるので行き先の方向やどの道を通るかが近い所なら予測できる。時には先頭で歩き 岐路でどの道を選択しようか考えたり 大人に確かめたりすることもある。大人の働きかけでまわりの景色や状況に注目することもできる。友達に自分の感じたことを伝えるが すべての友達に目を向けるには至らず 遅くなった友達のことを忘れて 先頭の集団だけで先へ進んでしまうことも多い。

流れについていくタイプ

出かけることはきらいではないが 積極的参加ではなく 流れの後ろについていく参加である。今 自分はどのような道（坂道 階段 砂利道など）を歩いているかは意識しており 快の時には表情に出し 困惑した時には大人に伝えようとする。また 学校への帰路では今から学校へ戻るという感覚があり 自分でわかる地点まで来ると足早になり 大人の力を借りずに学校へ戻ることができる。主に大人の姿を追って 歩いていることが多いが 道の途中で出会った他の人の流れが強く感じられるとそちらについていってしまうこともある。時には堂々と道の真ん中を歩いて 車への注意を忘れていた生徒もいる。しかし 少しずつではあるが 大人から友達へと意識が移っている。

② 実態からのテーマ設定

昨年度は「いろいろな道を歩いてみよう」というテーマで取り組んできた。どのような道を歩かせるかは大人が決め 先導しながら子どもの様子を見つめ 先の2通りのことが見えてきた。今年度は主導権を徐々に子どもに渡し 子ども同士のかかわりを濃いものにすることを目指して「僕たち 私たちの散歩」をテーマとしてとりあげることにした。

③ テーマの考察

散歩には二つの方法がある。それぞれについてテーマとの関連を述べる。

・視点を特にもたず 気軽に出かける散歩（ぶらり散歩）

学校周辺の道や建物などを意識させ 子どもなりの理解の仕方での地図的なものを思い描かせることを目指したい。そこで事前学習でどの道を通るか予測し 決めることで自分たちの散歩を意識させたい。主体的に取り組ませるために リーダーをその時々で交替することにした。先頭にたつ生徒を他の生徒が意識すること またリーダーの生徒は後ろの友達の様子に目を配ることを通して友達とのかかわりを深めさせたい。

・視点をもって出かける散歩（目的散歩）

目的地で何かを見たり したりといった校外学習的要素もここには多少含まれる。

目的地はその日の課題によって事前学習の際に考えたり 未知の目的地として捉えたりすることで 自分たちで探る気持ちを高め 自らのものにしたい。

その日の散歩が上記のどちらの方法であっても 自分で 時にはみんなで考えたりすることを大切にしたい。いろいろな場面で「わかる」ことを増やし ある日 点として捉えていたことがひとつつながりになる。それが知的な好奇心を充たし 冒険心や探求心につながる

ると考える。

④ 実践例

主に学校周辺を自分たちのものにしよう

4月 兼六園の花見を兼ねた学部全体の散歩がいつもスタートとなる。一番学校に近い場所であるが 昨年とはとにかく連れて歩くだけで精一杯だったが 一年がたって大人も子どももゆとりを持って どの道から行こうかなどと楽しみながらの散歩であった。数日後桜の花が散らないうちにもう一か所どこかへいこう と大人の提案で浅野川べりの桜並木



どんな道でも 歩きます

を歩いた。途中にある木橋の上から川面に散る花びらをみんなで長い時間見とれていた。

その後の散歩ではどこへ行きたいか どんな道を歩きたいかを事前に尋ね どの道を通るか 簡単な地図をかいて確かめた。外では目的地の方向やどの道を選ぶかなどを考えさせるようにした。「あした散歩 どこいく？」の音が子どもから出るようになり 当日は朝から予定黒板に「さんぽ」と書いて楽しみに待つ姿が見られた。

梅雨時には雨が降っても出かけた。通学路で目にしてこの時期の花「あじさい」に注目させ 様々な色を探して歩こう 写真にしよう と提案すると花を捜し求めて予想される場所や道を自分たちで選びながら進んだ。発話のない生徒には具体的に紫陽花をさわったり 色を確かめることで その日の散歩の中心が何かを理解させるようにした。

一学期後半のある日 散歩先で休憩している時に教師二人は姿を隠した。自分たちでどのような行動をとるかを考えさせることにした。最初は汗がひくまでそれぞれがすわって待っていたが 時間が経つにつれ一人二人と立ち上がり始めた。30分は待ただろうか。一向に動く気配はない、立ち上がった生徒もウロウロするだけである。教師の姿がないことにも気付いていないようである。自分たちで解決していくのはまだ先の事らしい。しかたなく隠れたまま声だけで「さあ 帰るよ」と呼びかけてみた。みんながそこで初めて教師の姿を探し始めた。声の方向を探して 隠れていた教師のところへやって来る生徒と何人かのかたまって一人がリーダーになり動き出す生徒に別れて行動を始めた。かたまって動き出した数人の生徒たちは声とは反対の方へ歩きだしたので 最後は教師が姿をみせ呼び戻してしまった。

もしかすると自分たちで学校へ戻る事ができたかもしれない。しかし生徒全員が揃わないまま行動させることについてはためらいがあった。仲間への意識や自分たちで考えることはまだまだ充分ではないことを再確認した出来事であった。

Y男の抵抗による新たな模索

一学期の最後の散歩では 距離的には近い卯辰山中腹あたりの景色のよいところを探して 坂道や階段を巡った。この日は蒸し暑かったこともあって 肥満傾向にあるY男が先へ進むことに抵抗した。今までは先頭になってみんなと歩いたこともあったが 暑さと坂

道や階段が体力を消耗させ気力にも影響していた。最終地点の景色を一望できる場所で「いいながめだから早くおいでよ」と呼びかけてもその下の道にすわりこんで全く動こうとしなかった。この時からY男の散歩への抵抗が始まった。

今年の夏は昨年同様猛暑の日が続き二学期になってもなかなか涼しくならなかった。二学期が始まって4日目 学部全体でブドウ狩りにでかけた。各学級ごと目的地までの経路は違って ブドウ畑で会おうとそれぞれで出発した。2年生は行きは途中までバスを使った。一学期の最後に歩くことに抵抗したY男はバスを降りたとたん だらだらと歩いてみんなから離れていく。彼は 夏休み家からほとんど外へ出ていない。猛暑がこたえたらしい。体を動かさずに40日を過ごせば歩くことが億劫になるはずである。しかし ブドウ狩りだから行きたいという気持ちはもっていたので 行きはなんとかたどりつくことができた。収穫後 学校への帰り道は1年生と3年生が徒歩で出発した。2年生はバスで帰ろうと考えていたがバスがその時間帯になかったので他の学年同様歩いて帰ることにした。今までで一番長い距離の散歩となった。去年は 体格の一番小さいO子がどうしても遅れがちになったので 遠くへ出かけることはあまりなかった。一学期の散歩では距離は短かったものの O子は体力もつき 足取りがしっかりしてきたので 長い距離でも歩けそうだと判断してブドウ畑を出発した。O子よりもY男の気持ちがどこまで続くかの方が気になった。結局Y男がみんなに追いつくのを何度も待ち かなりの時間をかけて学校へたどりついた。

Y男はついに「散歩行かない」と言うようになった。あす散歩があると察知すると「休みたい」と言ったり 散歩ではないことをしようと言うようになってしまった。

Y男は 友達を思いやりその場の雰囲気を知るくするので クラスでは中心的存在である。統率力は今ひとつだがY男がリーダーとして みんなをまとめていくことを望んでいた。だからY男が「行きたくない」ということは大問題であった。Y男が主体的に取り組む散歩を考えなければならなかった。もう一度彼の気持ちが前向きになるには何か好きなことを取り入れることがよいだろう。彼だけでなく みんなが好きになれることを思案することになった。

バスを利用した散歩をしよう

Y男の抵抗をきっかけに考えたのは 行きはバスを利用して 帰りは学校まで歩くという散歩であった。生徒には「もう少し遠くの方も知ろう」と提案した。金沢市内のあちこちから通学する生徒は利用するバス停やバスがそれぞれ違う。自分の乗るバスの路線については景色やバス停の名前などもよく知っている。中にはバスの行き先表示に興味を持つ生徒もいるので「バス」にはいい反応をしたのである。



行きは バスにのって

学校の近くにある「兼六園下」というバス停は行き先によって5つの乗り場がある。1～5の数字カードから1枚をひく。あらかじめ 番号をつけたバス停の地図を作成したので その日どこからバスに乗るかはこの地図を使って確認した。いくつめで降りるかは時間や市内均一料金のエリア内など考慮して こちらで決める。そしてバスから降りたら 学校がどの方向かを確認しながら戻ってくる。この散歩では 大人があまり介入せず 生徒の力で散歩を進めていくことをねらった。

バス停までは生徒だけでも行くことができる。自分が通学で利用するバス停であればその生徒は自然とリーダーになる。何行きバスが来るかは大人も子どももわからないので期待が高まる。自分が乗ると同じバスが来ると友達に伝えようとする生徒がいたりバス停の名前を教えようとする生徒もいる。乗ってから降りるまで興味はつきない。バスを降りると「さあ 学校はどっち？」の問いで帰り道を決める。大抵は バスの通る大通りを歩こうとするので 大人が大通りからはずれた道に入ることを提案する。大通りを歩くことで地図的な見方ができることはあるが 探究心 冒険心を追求するには知らない道を通りたいと考えた。大人と子どもとがどんな発見をし どのような子どもの姿が見えるかを期待した。心配していたY男が興味を示した。歩くことが少なくてすむと感じ 帰り道を歩く意欲も出た。他の生徒もバスへの興味が充たされ帰り道でも どの道を選択するかまわりの風景などにも注目するようになった。季節が秋ということで 木々の葉の色 柿やどんぐりなどの実をみつけて楽しんだ。途中で公園があると少し寄り道をしてブランコやジャングルジムなどの遊具でしばらく遊ぶこともあった。自分だけの楽しみにせず友達とかかわる姿を多く見るようになった。時には 楽しいことばかりではなく大型犬が道を通る生徒に向かって吠えたりすることがあった。突然動きが止まるY男。彼がみんなから遅れる時に限って吠えられるので犬の前を通り過ぎるのは容易ではなかった。大抵は彼一人遠回りをしてしまうのだが 犬がつながれていることや みんなと一緒にいることを確認すると 意を決して歩きだすようになった。無事に通り過ぎることができると友達と一緒に喜び合った。そのことをその日の主な話題として 学校へ戻ってからの事後学習の中に取り入れた。

事後学習では乗ったバスや乗り降りしたバス停を確認し その日の出来事を振り返って それらを簡単な絵をかいたものにまとめ 写真と共に掲示した。自分の姿を写真に見つけて喜び 次への期待を膨らませて散歩を楽しむようになった。Y男の抵抗をきっかけに新たな方向を模索することができたといえる。

⑤ まとめ

誰でもリーダーになってみよう

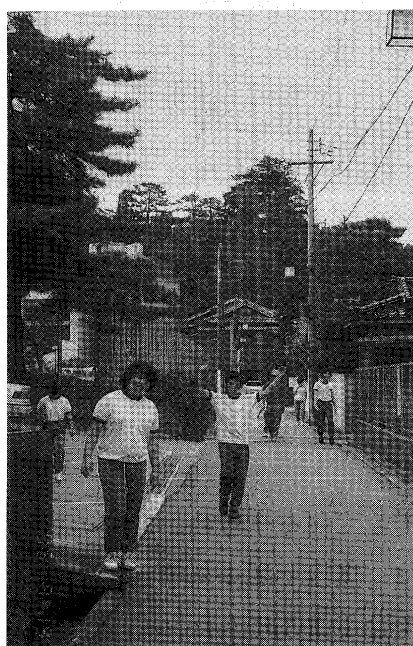
二学期も12月に入った。行事が続く バス 利用の散歩もしばらく中断していた。誰もが先頭に立つ機会をこのあたりで作り 一人一



「きょうの先頭〇〇さん」

人が学校周辺の地図をどの程度拡げていけたかを知ろうと まず日頃流れについていくことが多い生徒を先頭にし みんなで後ろをついていくことにした。当日の先頭のS子はいつもは流れについていくことで安心しているところがあり 出発して前に誰もいないことがわかり不安そうだった。いつも先頭にいきたがる生徒を前へ出ないようにしながらとぼとぼと歩くS子のペースで歩いた。時々みんながどうしているかとS子は後ろを振り返って見る。どこへ行くのか どこに興味を持っているか何を手がかりにしているか予測ができず S子を「待つ」姿勢が求められた。

彼女は大通りに向かった。そしてどうやら興味はスーパーマーケットや食べ物に関係した店にあることが分かった。途中S子以外の生徒も寄りたかった「たこやき」の店がまだ



開店しておらず大人も子どももがっかりする場面があった。S子は目標を失ったかのようにみえた。そして ひたすら大通りをまっすぐ歩き続けた。大きな交差点で歩道がとぎれた。考え込むS子。しばらくして横断歩道を渡ろうと決めた。そして反対側の歩道に戻ることを考えた。ここまで誰の援助も借りず 一人で進んできたことがうれしかった。その後S子は「すし」の看板を見つけ その前で立ち止まった。その持ちかえり寿司の店で品物を一つ買い 帰路についた。そして再び通った「たこやき」の店が開店したことを見つけ みんなでまた立ち寄って全員が満足して学校に戻った。

誰もが先頭に立てると確信した。みんながかかわりを深めてきた今 「僕たち 私たちの散歩」が充実してきたこ

「おーい かえってきたよー」 とを感じている。 (能 岡 晶 子)

(3) 中学部3年の実践から

① 生徒の実態

中学部3年生は男子6名 女子1名で構成されている。言葉によるやりとりは あまり活発ではない。また 自閉的傾向の生徒が多いため 他の生徒を意識することが苦手である。しかし一緒に2年間を過ごし 3年目である今年は 友達への理解や仲間意識が深まり クラスとしてのまとまりができつつある。

中学部も最終学年となり 自我が確立し 自己主張が強くなっているが 学習のいろいろな場面では素早く行動できたり 部集会でも運営を担当するなど中学部の手本となるべく努力をしている姿も見られ 年々落ち着きが出てきたように見える。

1年生の頃は まず散歩を理解することから始まった。どの位の距離を歩いて何をしてくるのかという基本的なことの理解と 慣れるに従って 外に出かけることで気持ちが開放され ドキドキ わくわくする場面にも出会い それを楽しむこともできるようになってきた。

2年生では外界とのかかわりがより多くなる所へ出かけ その中での自分や仲間を意識

させるようにした。

3年生になって個々に体力的 精神的な成長が見られ 事前学習により 目的を明確にすると 散歩中でも生徒がリードし教師が後ろからついていくという形に変わり 以前より積極性が見られるようになった。

② 実態からのテーマ設定

今年度は 過去の2年間で踏まえて生徒自らがどれだけ目的を理解して 自分や友達を意識し 考えて行動できるか 次のねらいを考えた。

- ・目的を持ち 自分たちの散歩を作る
- ・集団の一員として自覚し行動する

そこで「自らが考えて行動する散歩」というテーマを設定した。



「今日はX'masカード 買いにきたよ」

③ テーマについての考察

散歩中に 友達と離れても無関心であったり 進む方向に対して強いこだわりがあったり 散歩中に危険を注意されると大声で怒ったりと とてもゆったりと散歩を味わう余裕はなかった。しかし 2年間の積み重ねにより 散歩のための事前学習で目的が分かり教師の援助がなくても数人の生徒がリードし 他の生徒もその目的を理解して ついていくようにと願った。

そこで 生徒一人一人がどこを通過してどこに行くのか そして何をするのかなどの目的意識を持ち 自覚して散歩に取り組めるよう出かける前には 黒板で散歩の順路を文字・絵・マークなどで生徒それぞれが分かるように学習し行動できるようにした。

特に生徒たちが興味を持ちやすい身近な食べ物店のパンやうどんや豆腐などの店を生徒が探して そこで作っているところを見たり その場で話を聞いたり 実際に食べるなどしてより散歩に興味を持たせるようにした。

また 7名中4名が自転車に乗れ 残りの3名も練習次第で乗ることができる状態にあった。そこで 本来散歩は歩くことが主であるが自転車を引いて歩く散歩も考えた。やがて「みんなでサイクリングをしよう」という目標をたて 意欲的に取り組んで欲しいと願った。

④ 実践例

うどんを食べに行こう

11月初旬の土曜日 うどんを食べに行くことになった。以前からうどん屋を探し うどんの作り方を見たり うどんを食べてくるといふ目的で何度か散歩を行った。あいにくいずれの日も休業日で目的が達成されていなかった。そこで再度うどんを食べに行くことを試みることにした。しかし 食べに行くという目的に加え もう一步踏み出し自分たちだけで行くという条件をつけることにした。教師のいない初めての散歩の実行である。

この日行くことになったうどん屋までのコースは 何度か歩いたことがある。目的地は人がたくさん集まる市場の中にあり 土曜日で平日より賑わっているということで 担任

にも不安があった。それで目的地の近くにあるクラスの生徒の父親が勤める店の前に集合することにした。集合場所で待っている担任と 姿を現さず後ろからついて行き様子をうかがう担任とに分かれた。



「みんな うしろに いるかな」

やはりいないことを確認してから みんなについていく友達や どんどん先に行きたがる友達に「みんな いっしょに いくよ」と声かけをしていた。

そのI男とK男も不安からだろうか二人手をつなぎ 全体の様子を伺っていた。途中何度もバラバラになりそうになったが 声かけ合って待つことができたり 互いに周りを意識して他の生徒のことを思いやる姿が見られた。

集合場所に着いたI男とK男は「先生 きたよ」「やったよ」「うどん食べに行くか」とリードしてきた自信に満ちた顔であった。みんな 担任に会えたという安堵の顔。自分たちだけで来ることができたという満足感。それぞれ 本当がいい顔をしていた。その後 みんなで揃ってうどんを食べた。言うまでもなく 生徒への信頼が増したこの散歩。生徒同士のかかわり合いが見えた散歩。目的が達成され喜びに満ちた散歩。以前とは違い みんなと一緒に行動ができるようになった個の成長 またクラスの成長を見ることができた散歩であった。

ぼくも自転車に乗れたよ

昨年 今年と夏休み中にクラスの親子でサイクリングターミナルへ行く機会があった。そこで 自転車に乗ることができる生徒4名は自由に乗り回して楽しむことができた。しかし まだ乗れない他の3名の生徒は 母親が一生懸命に教えるのだが 初めのうちは頑張ってもそのうちに諦めて 結局は自由に乗り回している生徒を待っているという状況であった。

担任はそんな経緯を知っていたので 是非 今年こそは全員が乗れるようになり 揃ってサイクリングに出かけられるようになることを夢見ていた。そんな自転車に乗ることのできない3名中の一人 I男は学校生活において3年生のリーダー的な存在である。走ることも速く ボールを打つことも上手で 学習も意欲的に取り組んでいる。散歩をしても先頭に立ち 遅れる友達に対しての言葉かけもよく見られる。このI男が自転車をひくとハンドルをうまく操作できずに道路の溝に寄っていったり 倒してしまったりする。自転車を持つといつも最後尾になるが 自転車をひいての散歩には渋々ついてきていた。そし

て倒しては起こし ぶつかっては起こし それでもクラスの集団に遅れたくない一心で真剣な表情になり 汗をかいてついていった。

これをきっかけにして 毎日のように休み時間でも運動場で練習するようになり ついに自転車に乗ることができるようになった。この時の嬉しさはI男にとって格別なものであったらしく 会う先生ごとに「ぼく自転車に乗れたよ やった やった」とガッツポーズを見せていた。

子どもたちの身体的発達から見ても 練習次第で乗れる可能性は高かったといえるが

「サイクリングに行く」という一つの目標に向かって クラス全員で挑戦し 成し遂げたいというエネルギーは大切なものの一つであると考え。今ではこのI男をはじめ 他の乗れなかった生徒も乗れるようになり 目標に向かって 大きく第一歩を踏み出したのである。



「おととととと たおれる」

散歩中のハプニング

好天に誘われ 豆腐作りのための材料である大豆購入のため 学校の近くの繁華街にある市場へと出かけた。用事も済ませ時間もあったので予定に入っていなかったスーパー見学に行くことを生徒に話し 連絡路である地下道に入った。バランスの悪い一人の生徒が階段で遅れ つられて一緒に手をつないでいた生徒の一人も遅れてしまった。担任はすぐに来ようと思いき先に行き スーパーの入り口で他の生徒とともに待っていたが なかなか来ないので見に戻るとそこに二人はいなかったのである。

それから二人の担任の内の一人が周辺の街の雑踏のなかを30分近く探し回った。その間他の5人の生徒は すぐに入れると思っていたスーパーの入り口で足止めをくってしまった。発話のない生徒は「ピッピッ」と入り口を指さし また 早く入りたい生徒は ピョンピョンと飛び跳ねながら入ろうとしていたが 理由を話すと納得した顔で戻ってきた。ひょうきんな生徒は通りすがりの人に「おばちゃん おじちゃん」と声をかけたり 歌の好きな生徒と一緒に歌をうたったり それにあわせて体を動かす生徒もいて まるでスーパーの前でパフォーマンスをしているように見えた。しかし 時折「いない」と報告に戻ってくる担任の不安げな表情を見て 生徒たちにもこの非常事態がわかってきたのか 神妙な顔つきになる生徒や 先程まで飛び跳ねていた生徒もじっと座り込み 歌をうたっていた生徒も「どこいってしもたんかね」と心配げに語りかけてきた。また 去年の散歩で 自分のペースで先に歩いて行き 集団から離れてしまう失敗をした生徒が 暗くなりそうな雰囲気を感じとり「せんせ だいじょーぶ みんなだいじょーぶ あとからくるよ」と元気づけてくれた。そうこうしているうち まさか自分たちでスーパーの中に入っているとは思わなかったが 半信半疑でスーパーの中を探してみると「いた!」。家電売場で嬉しそうに大型冷蔵庫を見ていた二人を見つけたのである。はぐれた二人は地下道の

横道から地上に出て そのままスーパーの6階まで上がっていったようである。

このように 同級生たちが行方の知らない友達のことを気遣って待っていることができたり 場に応じた言葉かけができたりするとは 担任も予期しなかったことである。また行方不明となっていた二人も 実は「スーパーへ行く」という教師の話を しっかり受け止めて行動していたことに気がついた。予定変更をどのように伝えるか 言葉かけの難しさを知った。また行方不明になった二人が話の内容のわかる生徒と理解していれば すぐに見つけることも可能だったのではないかとも思え 今後の対応の参考となった。

⑤ まとめ

生徒たちだけで 目的地まで出かける様子を 後ろから隠れるようにして行く。その時の教師の気持ちは 三年間の積み重ねで絶対に大丈夫だという信頼と やはり危険を気づかう不安とで 手に汗を握りながら見ていたことを思い起こす。

三年間 この子どもたちと散歩をともにし いろいろなことを共有することができた。自然を思いっきり満喫できた散歩。公共の場を緊張した顔で歩いた散歩。子どもたちだけで目的地まで行った散歩。それぞれの散歩には それぞれのねらいがある。しかし共通していえるのは 生徒一人一人の素直な姿が見えてくることである。担任の見舞いのために病院へ行くことを話すと 先頭を歩いて 自分の知っている違う病院の玄関前に立って教えてくれた発話のない生徒。お店探しで目的の店とは違うとあって最後まで食べてくれなかった生徒。母親とは絶対に一緒に乗らないバスも クラスの友達とは乗ることができる生徒。このように教室では出し切れず 友達同士のかかわりから初めて見せるその子なりの思いを 散歩のなかで数多く見ることができた。このような個々の子どもの豊かな感性の芽を 私たち教師は大切に育まなければならない。散歩は適切な対応を要求される場でもあり 機会でもあると考える。

最後に 三年間 散歩を見守ってきた親からの連絡帳の言葉を紹介して 結びとしたい。

11月〇日 パパに誘われて二人で散歩に出かけていきました。どんなに歩きにくい道も平気でついてくるU男。パパの方が先にばててしまい 膝に手をあててハーハーいっていると そんなパパの顔を覗き込んでニコニコ笑う余裕さえみせたとか。

「U男どれだけでも歩けるのか」と思わず尋ねるパパに「歩ける」と答えるU男。渋々ついていったはずの散歩なのに「散歩好きか」と聞かれて「好き！」ときっぱり答えていたそうです。きっとパパに対して優越感を覚えたのでしょうね。

11月〇日 U男がジュースを買いに行こうと言いたけれど車がない。仕方ないから二人で散歩。てくてく歩いていると 横を大きなトラックがバァーッと行ってびっくりしたり 道端にみぞれが積もっているのを見ついたりとなかなか楽しいものでした。帰りはU男が荷物を持ってくれたし たまには散歩もいいなと思いました。

(今井 康 弘・寺 澤 聡・西 村 麻 里)

3. まとめ

昨年度に続き「散歩」を研究テーマにあげ 中学部の生徒にとっての「豊かな心と生活」像を明らかにするために 実践を重ねてきた。「散歩」を研究のまな板に乗せたことで散歩本来の良さが見失われたり 教師の思いで生徒をつれまわしたりと結果的に意に反した散歩になったこともあった。また「散歩 行かない」と言い出す生徒や街中で迷子になる生徒も出たり 散歩をどう捉えるか 幾度も私たちの姿勢が問われた。その都度 話し合いの末にたどりつくのは「いろいろあるけど 散歩はいいね」である。その良さはどこにあったのだろうか。

1年生では「川 いく」を合言葉にリュックを背負っての お出かけである。学校から外へ出かけるという大きな行動の変換は あらゆる場面において個々に直截に自己決定をせまってくる。1年生にとって勇気のいる 自立への第一歩である。また散歩から帰り 周りの大人に「川 いった」「さんぽ 川」など自分から進んで伝えている。散歩はコミュニケーションの楽しさを引き出し 言葉を育てることにもなる。

2年生のY子はたこやき屋が閉まっっていて ぼろぼろ 涙をながす。教室から期待いっぱい持って出かけてきたのに それがあっけなく破れてしまったからである。涙をみせたことのない勝気な彼女の涙は Y男を動かした。開店を待って おばちゃんにたのむことになる。散歩は子どもの感情をゆさぶり 子どもの気持ちをつなぐ。

全員が自転車に乗れるようになった3年生は ぞろぞろ自転車をひっぱって 街中の公園に出かける。教師は感慨深げに走り回る子どもたちの姿を追っている。かつてすんなり教室から出ることさえ難しかった生徒 歩く道にこだわった生徒 物を持つことに抵抗のあった生徒 それらをのりこえての自転車散歩に教師も親も感動をかくさない。散歩でつけた行動調整力は大きい。当時見えなかった子どもの変容を中学部最終学年において確かめることができる喜び 親と学校の信頼が散歩で強くもなる。

改めて散歩の持つ多様な教育力にふれた気がする。一人一人にとって周りから受ける刺激は新鮮である。また周りへ働きかける機会も多く 主体性の育ち 自己実現につながる自己開発もみのがせない。さらに驚きや発見の伝え合いは学級の仲間意識を高めると共に教師と生徒の関係を自然なものにしていく。年度当初 初めて散歩に取り組んだ一人の教師は「一緒に歩くことで 子どもたちに受け入れてもらえるような気がした。仲良くなれる。散歩は仲間になれる一つのきっかけとなる。教室ではどうしても先生と生徒という教える・教えられる関係になりがちである」と感想を語っているが ここにも私たちは散歩の良さを感じている。

この散歩に子どもたちの発達課題や学級のねらいをいかに織り込んでいくか これまでの課題であり これからの課題でもある。大事なことは散歩で見せる子どもたちの自然や社会との出会い 友達とのふれあい それらを教師はじっくり見守り しっかりアンテナをはることである。そして教師間で その情報を交換しあい いかに織りあげていくかを

話し合って初めて「いい散歩」ができあがるのである。

今年度は昨年度の散歩のねらいを見直しながら カリキュラム化の方向を目指した。楽しかった うまくいった そんな散歩の要素を整理してみたが カリキュラム化し系統だてるまでに至っていない。果してカリキュラム化できるのだろうか 散歩の系統はあるのだろうかと言った疑問もでてきている。しかしいづれにしろ生徒の学習の場として散歩を設定することの大切さや 中学部3年間で散歩を通して育てたい力を明らかにしつつある。

また散歩の形態 散歩の場 散歩へのアプローチ 指導の手だてなども 少しずつではあるが見えはじめている。学校周辺の地域や家庭との連携を深めながら 今後も子どもたちと共に創り上げる散歩をめざして実践を積み上げていきたい。

散歩を研究対象とすることで 教室内での学習についても考える機会が増えた。研究テーマである子どもたちの「豊かな心と生活」の視点にたって 教育活動全般にわたって常に見直す姿勢を持って指導にあたりたいと考えている。

(榎 蔵 千恵子)

参考文献

- ・本校研究紀要「豊かな心と生活をめざして」(平成6年度)